羽田平和記念祭

忘れてはいけない、羽田９２１の日、一夜にして江戸時代に羽田の先人達が新田開発をし、血と涙と汗の結晶で築き上げ培って来た長い歴史の礎が、昭和２０年９月２１日、米軍による強制立退きが命じられ此の土地に有った三つの町、羽田鈴木町、羽田穴守町、羽田江戸見町の町は消えて失われた、廃墟となった土地ですが、羽田穴守町に有った穴守神社が放棄した赤い鳥居だけが此の土地に残ったのです、この鳥居を米軍が取り壊そうとすると、相次ぐ事故が発生し、米軍の死者さらに日本人の工事に携わった業者の中にも重傷者が出て工事は中止となりました。

此の土地を築き上げた御先祖様をないがしろにした結果であり決して祟り（たたり）の鳥居ではなく此の土地の歴史を鳥居が守り伝えているのです。

私たちが、平成１１年２月４日に移設になった鳥居に平和の額を掛け、管理清掃活動を行い、先人達が求めていた、平和を存続して行く事が私達の使命であると同時に未来の子供達に伝え後世に残したい。

☆ 先人達の残した偉業の大地が蘇えり、世界平和へと羽ばたく事を誓います☆

忘れてはいけない

昭和二十年九月二十一日　（強制立退きが行なわれた日）
平成十一年二月四日　（羽田穴守町から弁天橋袂の羽田鈴木町に鳥居が移設になった日、羽田ボランティア推進の会で鳥居周辺の清掃活動が始まる）
平成十一年七月十八日　（大鳥居に平和の額を奉納）
平成十八年七月三十日　（第一回羽田平和記念際、江戸消防記念会の方々により紅白の〆と、木遣の御協力を頂きました）
平成十九年五月二十八日　（祟りの鳥居と異名付けられていた鳥居でしたが、囲っていたフェンスが取り外され、鳥居の下をくぐれるようになりました）
平成十九年九月二十一日　（第二回羽田平和記念祭、平和を願い五年物の桜の記念樹を植樹し。鳥居に平和の鈴を取り付けました）
平成十五年九月二十一日　（ユニセフ募金箱設置）

忘れてはいけない羽田の出来事

現在の「平和の大鳥居」のある周辺は戦前（第二次世界大戦前）鈴木町、穴守町、江戸見町という町からなっていました、この三つの町には約3,000千名の人々が住んで生活をしていました。

日本が戦争に敗けたのでアメリカ（進駐軍）はこの土地を接収し空港を造ることにしました（日本戦後の復興）しかし空港を造るには、その町に人々が住んでいたのでは造ることが出来ません、そこで進駐軍（アメリカ）と当事の蒲田区、区長からの緊急命令で、鈴木町、穴守町、江戸見町に住んでいる人々全員に、昭和２０年９月２１日の日、２４時間以内に、その土地を出ろと言う緊急立退き命令を出された。

日本は敗戦国なのでその命令に反対する事も出来ません、しかし２４時間以内で立退くにあまりにも時間が有りません、住民交渉の末１日延びて４８時間以内の立退き命令となりました、昭和２０年９月２１，２２日の両日は住民にとって、とても慌ただしい日となりました。

持ち出せる家財、おしくも置いてゆかざるを得ない物、戦争で焼けて何も無い時代、全てを持って行きたくてもそれが出来ないのです、男衆はそれぞれ、自分の住んでいた家を壊し（解体）その材料を確保します,当座の落着き先のある家族はそこにバラックを建てさせてもらうためです、親類、知人を頼る人それら一時しのぎにせよ生活の場所が確保できた人達は少しは良いが、それも出来ない人達、途方に暮れる人達、それでも４８時間がたてば、住みなれた土地を離れたのです。

今ある平和の鳥居は、鈴木町、穴守町、江戸見町の人達が生活をしていた場所にあったものです（平成１１年２月に現在の場所に移設）

現在、三つの町で人々が生活をしていたという証になるものはこの鳥居と、強制立退きの日、住民の一人、村石鈴ノ助氏が植えたアキニレの木があります、現在空港跡地は、戦前、鈴木町、穴守町、江戸見町、があった場所です。

そこに住んでいた人達にとっては、とても思いでのある古里の場所です。

・・・・・・・・　忘れないでほしい羽田史・・・・・・・

現在このような歴史が戦後６０年以上がたち風化しようとしているなか、羽田ボランティア推進の会では９月２１日の日に旧住民、地域の人々を交えて当時をなつかしみ又親睦を兼ね、過去の歴史を再認識しようと羽田平和記念祭として行事を行っています。

当日は平和の鳥居に、いろいろな感想、意見、夢などを書いた短冊を笹竹につけて飾ろうと思います、つきましては、皆様方には、どんな事でもかまいませんので、短冊に自分の思い、夢などをしたためてもらえば幸いです、又当日は平和の鳥居の下にある募金箱も開封しますので立会いをしていただければと思います。

この募金箱に入っている募金は、東京の財団法人日本ユニセフ協会に届け全世界の子供たちの健康と命を守り支援し羽田から未来の子供達に平和の絆のメッセージとして伝えています。

羽田ボランティア推進の会

旧穴守稲荷の大鳥居
平和の額はどこへ

本誌198号（2000年1月号）でもお伝えした、旧穴守稲荷の大鳥居をめぐるスッタモンダがまだ続いている。

地元の有志によって作られた「平和」の額の存続をめぐって、羽田ボランティア推進の会（発起人・吉田清光氏）と羽田の東京空港事務所が今年1月末に話し合ったが、交渉は決裂。空港事務所はあくまで、額をおろしてほしいと要望している。

羽田ボランティア推進の会の吉田氏は「羽田の穴守町、鈴木町、江戸見町の歴史があるからこそ、空港の歴史もある。額は平和の象徴として掲げたもの。下ろす理由が誰が聞いても納得のいく理由なら、下ろすが、空港事務所の理由は理解できない」と存続を訴え続けている。

これに対し、空港事務所は「大鳥居が移転した弁天橋のたもとは国有地。大鳥居は旧空港駐車場にあった時から何も掲げていなかったので、そのままにしてほしい。一部団体の額寄贈を受け入れると何かと誤解を招きかねない」とコメントしている。

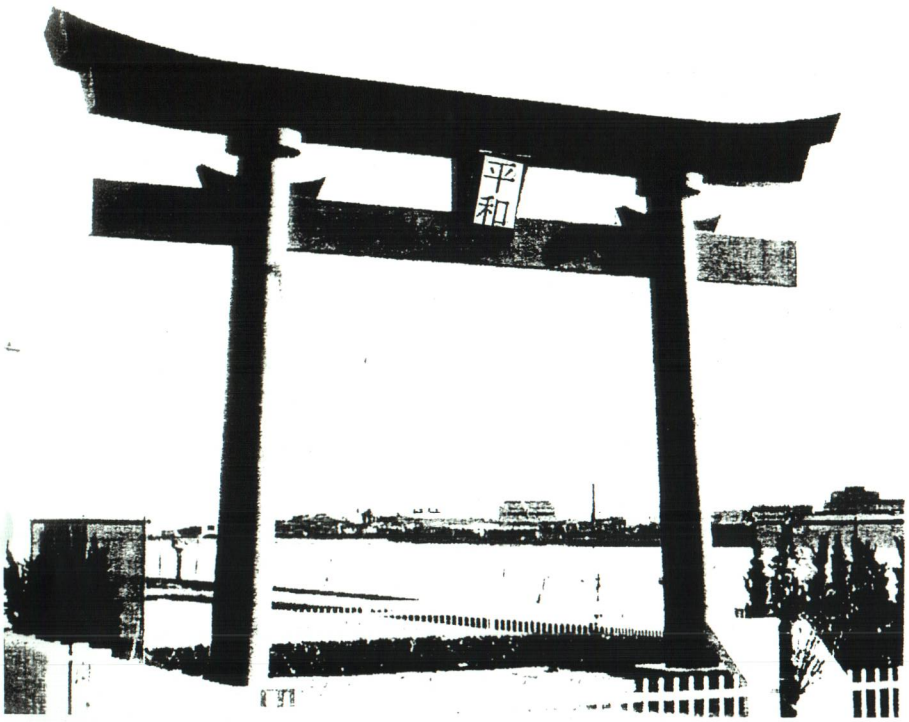
羽田には大鳥居保存にからんだ地元の有志団体がいくつもあり、その足並みがそろっていない。今回の額は羽田ボランティア推進の会と大鳥居保存会が中心となって製作。しかし、中にはその活動をよく思っていない団体もあるという。このため、空港事務所では、額存続の要望が地元の総意とは受けとれず認められない、という側面もあるのだ。

また、空港沖合展開事業の中で、今後、大鳥居の所在地が転売される計画もある。そうなると、将来的には大鳥居がなくなる可能性も否定できない。

大鳥居を保存するためには、地元がもっとまとまる必要があるのではないか。空港事務所では「大田区などが地元をまとめてくれれば検討の余地はあるのだが…」と言うが、区としては国有地のことに、なかなか口を出しにくいようだ。しかし、ここまでこじれてしまうと、間に立つ第3者が必要ではないか。

羽田ボランティア推進の会では理由に納得できない限り「平和」の額は下ろさないという。そうなると、空港事務所が下ろすことになるのだが、今後、額はどうなってしまうのだろうか。

大鳥居前の記念碑には「地域と空港の共生のシンボルとして…」と刻まれているが、本当の意味で共生できる日が早く訪れることを願いたい。

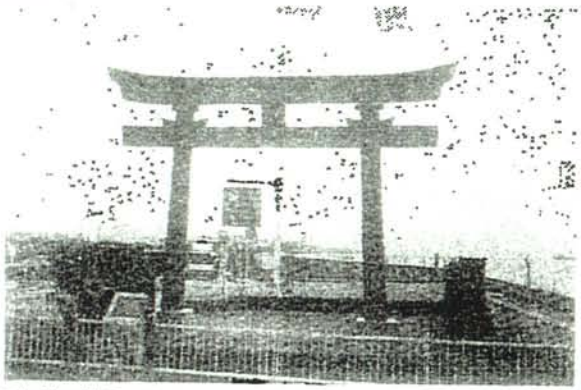


羽田空港と大鳥居

いよいよ鳥居をという番になって工事関係者が二度も足を滑らせて落ち、米兵も機械にはさまれて死ぬ、ということがありました。それからだれ言うともなく「お稲荷さんの使者キツネのたたりだ」とのうわさがたち、工事は中止、そのままそこにとり残されました。

長く旧空港ビル前の駐車場にあったその大鳥居も、一九九九(平成十一)年二月に多摩川と海老取川の分岐点近くの弁天橋際に移され、ボランティア団体の手で掲げられた「平和」と書かれた額が、多摩川の悠久の流れをみつめています。

(多田鉄男)



3年前の移設の際も突風が吹いたという

↑海と河に抱かれて、羽田は近いのにいつも別世界の匂いがする。移転した大鳥居の「平和」の文字がまぶしく、この地の半世紀、人の世のあれやこれやを思わずにいられない。

トヨウケ姫▼えすみ友子

『四千人の陳情の、署名運動』により当時の「運輸省」にそれを、提出し平和の額を空港内に在る、鳥居に奉納する事が認められました。

我々羽田の住民は、先人達が江戸時代に干拓し、築き上げた漁師町の町、(羽田鈴木町、羽田穴守町、羽田江戸見町)の偉業の在る町、先人達の魂が宿る平和の額の鳥居に心から、敬意を表する。

今まさに(羽田鈴木町・羽田穴守町・羽田江戸見町)が蘇える

羽田ボランティア推進の会

平和の大鳥居の額（可決）となりましたので安心して下さい。

約三千五百名の陳情が（可決）し世界平和のシンボルである、平和の大鳥居が、羽田の先人達の干拓し築き上げた偉業ある羽田の大地、この歴史と文化を伝え、今世界の子供達の命と健康を守り、子供達の生きる権利、世界平和のユニセフ募金に貢献をさせて頂いております。

先人達に感謝すると共に私達は国際平和を共存し世界平和のシンボルである平和の大鳥居を存続させ全世界の未来ある子供たちに伝えたい。

愛の手を差し伸べる

そこに幸福の

出会いと奇跡がある

ユニセフをご支援ください！

皆様からのユニセフ募金は、世界の子どもたちへのユニセフ活動の大きな支えです。